

- ◎前回の山、東吉野村の明神平は楽しかった、白い雪と青い空・・・、なんて考えながら10日ほど日にちが経つと、山に行きたいなという気持ち湧き上がってくる。「どうしようかな」とうじうじ考えながら天気予報を見ると、曇りマークと晴れマークが重なっている日が続いている。山は晴れた日がいい、穏やかな日がいい、いつも願っているがそう思い通りにはならない。平地なら晴れている日でも、上は曇って雨混じりなんてことはざらにある。なんて日々が過ぎ、「ええい 明日 行こう」と前の晩にザック、靴、弁当などの用意をした。ええと何時の電車に乗ればと、前回のメモを調べ、7時9分発に乗るため阪急茨木市駅まで行った。桂駅で乗り換え、10分ほど待ってバスに乗り、8時過ぎに清滝まで来た。
- ◎8:30 いよいよ歩き始めた。清滝から月輪時の登山口までの林道には雪が残っている。この林道でこれだけの雪はめずらしい。何日か前の寒波では、京都の雪は多かったと聞いていた。風は冷たいがちょっとづつ晴れ間が出てきた。今日は、午前中は晴れ、午後から曇るらしい。
- ◎9時：月輪時登山口を登り始めた。最近よく同道してくれる三宅さんが、さあ出発という時に、あんころもちを配ってくれる、それを喰うと小腹に甘みが染みわたり快いので、オレも持参してみた、それを腹に収めて歩き出した。ここからは両手を放すと危険なのでサンドイッチはもう少し後で食べようともくろんでいる。林道も雪が残っていたが、登山道に入るともつと残っている。前日に人がたくさん歩いたのか、歩くのには苦にならないが、凍結してカンコチ部分には気をつけなくては・・・。
- ◎月輪時の手前に広場がある。そこでちょっと休憩した。最近靴の紐がよく解ける。去年痛風まがいの足イタ以来、靴の紐をキュッと結べない。キュッと結ぶと、またあの足イタに襲われるかもという恐怖から、紐はゆるゆるに結んでいる。なのでよくほどけるわけだ、今日も先程からほどけて垂れさがっているのはわかっていたので、まずはスパッツを外して紐を締めなおした。バケツぐらいの雪ダルマがある。雪ダルマを見ると心がほぐれる、嬉しくなるねとジジイの子ども心なり。ついでにアイゼンをつけた。
- ◎ICレコーダーには、ザリザリ、ジャリ多少固まった雪を踏みぬく音が聞こえる。こんな音も室内で聞くと、歩いていたその時の感覚が伝わってきて、楽しんでいる。
- ◎11:30 いつも弁当を喰っている場所にやって来た。気持ちがいい、雪満開だ。愛宕山の雪はホンワリ柔らかい、京都の雪ははんやりしてはるのかな、なんて先日の東吉野村の雪を思い出した。このあたりから嵐山市街がまる見え、桂川が蛇行している。この川の名は、地図では桂川となっているが、ちょっと上に行くと保津川なのか、地図では大堰川となっている。川は上流下流で名前が変わる、これはなかなか情緒的かもしれないけれど、ひとつにしてくれるとわかりやすいのだけれどもね。市街地の景色はどこなのか思っていたが、今地図で見ると、方角は南東方面、伏見や宇治、そして山々が連なり奈良方面が見えるのだ。
- ◎予報通り曇ってきた、上の方は青空が無くなりグレーの空、それでもまっすぐ視線の先、水平線に近い部分は明るく、黄色っぽく、赤色っぽく見渡せ、陽の光がモコモコ雲に当たり、天子の階段がおぼろに見える、というカッコいい景色なり。弁当は上の東屋で喰おうと進んだ。いつもの食事場所は雪に埋もれている。
- ◎カップ麺と固形スープを、テルモスも2本持ってきた。麺に湯を注ぎ、3分待つ間に東屋の棧に並べられたひよこかな、雪で作ったそれらを写真に撮った。まずは麺をいただきます、寒い時はこれがいいねえ。次に手作り弁当を開けもそもそ喰いだした。スープも作ってしまおうと食べ終わった面のカップに湯を注いだ。
- ◎今日は8時半から登りだした、早起きのおかげである。最近の山行は、交通時間がかかりすぎ、のぼり始めるのが10時過ぎのことが多かった。これでは弁当時間が1時ころになり、早々に食べて下山ということが多かった。ゆっくり山を楽しまなくっちゃ、次回からは早起きをして早い時間の出発を心掛けなくっちゃ。
- ◎時間が早いので、元スキー場の方まで行ってみるかと思ったが、空が暗くなりだし、オレの気持ちも暗雲がさし、今日は参道を下ることにした。えいほう、こらさあ・・・。
- ◎途中、丸太の雪が払われた場所を見つけ休憩した。ザックからリンゴを出した、ナイフでカットしてはもうちょっと、一個丸ごといただいた、美味いねえ。4時過ぎに家に帰りついた。

三浦祐之著<口語訳：古事記>

◎アナホの大君が、大後の連れ子：マヨワに殺された。マヨワは臣下のツブラノオホミの家に逃げ込んだ。

◎アナホと同じ腹の弟オホハツセは、同じ腹の兄：クロヒコの許に駆け付け、「あいつが大君を殺しました。どうすればいいのでしょうか」クロヒコは驚くでもなく、何かをしようというのではないそぶりに見えた。オホハツセは兄を罵り、

「ひとつには大君であり、ひとつには母を同じくする兄弟（はらから）であるというのに、どうして頼みにする心もなく、おのれの弟が殺されたと聞いて驚きもせず、何もしようとはしないのですか」兄の襟首をつかみ外に引きずり出し、切り殺してしまった。

◎オホハツセはその足で、もうひとりの兄であるシロヒコの許に向かって、同じことを言った。ところがシロヒコもクロヒコと同じような態度だった。それでまた同じようにシロヒコの襟首をつかみ引きずり出し、穴を掘って生き埋めにした。シロヒコは恐ろしさのあまり、二つの目玉が飛び出し死んでしまった。

◎先生：猛々しいとはいえ・・・これで、5人兄弟のうちオホハツセ以外が亡くなった。キナシロカルはアナホに攻められ伊予で亡くなった。よほど血に飢えた兄弟だったのかな。

◎生き残ったオホハツセは、軍を興し、マヨワを匿っているツブラノオホミの家を囲んだ。互いに射かける矢は、まるで沼に生えた葦のごとく乱れ飛んだ。

◎オホハツセが、「われが契りを交わしたおとめごは、もしや、この家にいますか」

ツブラノオホミが、履いた太刀を腰から外し、八たび額を土につけながら申し上げた。

◎先の日に声をかけていただいたわたしの娘、カラヒメは家の中におります。その娘のカラヒメは、私の持つております五所（いつどころ）の屯倉を副えて差し上げましょう。

しかしながら、私の身はオホハツセの御子様にお仕えすることができません。臣（おみ）や連が御子の宮に隠れたということは聞いておりますが、いまだ、御子が臣の家にお隠れになるというなど聞いたことがないからであります。とくと考えてみまするに、賤しいわたしツブラノオホミが力のかぎり戦うたところで、とてもオホハツセノ御様に勝つことなどありえないであります。それはわかっておりますが、わたしを頼みにして賤しい臣の家にお入りくだされた御子は、たとえわたしが死ぬとしても、見棄てることなどできるわけがございません。

◎先生：ツブラノオホミはまことの男よのう。

◎先生：御子が臣や連の家に逃げ込んだのは二度目。オホハツセの兄、キナシノカルが実の妹のソトホシと深い中になったというスキャンダルを嫌って、実の兄弟のアナホに攻められ、臣のオホマエヲマヘノスクネの家に逃げ込んだ。この時は、臣のオホマエヲマヘノスクネは戦わず、アナホに、キナシノカルを差し出した。キナシノカルは伊予に流され、伊予でソトホシと二人で亡くなった。

◎ツブラノオホミが差し上げると言った、五所の屯倉とは、葛城の族（うから）がもっておった。

◎ツブラノオホミは家に入り、戦ったが、力尽きたので、マヨワに申し上げた。

「私は、手傷を負ってしまいました。矢も尽き果てました・・・」

マヨワは、もうなすすべがないので、われを殺したまえ、といった。

ブラノオホミは太刀で、マヨワを刺し殺し、すぐさまおのれの首を切って死んだのじゃった。

◎娘のカラヒメが生んだ子は後に皇位に就くが、事実上、葛城氏はこの事件で滅びてしまう。葛城氏に支えられた河内王朝も、滅んでいく。

三浦祐之著<口語訳：古事記>

◎マヨワを殺したオオハツセだが、すぐには大君になれなかった。オホハツセワカタケルは、同母の兄弟、クロヒコ・シロヒコを殺して内部制圧した。残された後継候補は、オホエノイザホワケ（十七代履中）の御子であるイチノヘノオシハだけである。イザホワケの御子、オシハは、臣や連にからも好かれていた。語られていくのはオシハ殺害と、オシハの御子たちの受難物語。石川淳が、これを題材にして、小説、「狂風記」を書いている。オシハを倒さなければオホハツセの即位は叶わない。

◎オホハツセか、イチノヘノオシハか、残ったものが大君を継ぐような雲行きだった。オホハツセは大君になりたいゆえの悪知恵というか、陰謀というか、汚いやつだ、という表現でゴメン。

◎淡海（おうみ）の連（滋賀県：蒲生：近江八幡あたりの豪族）がオホハツセに、申し上げた。

「淡海の久多綿（くたわた）の蚊屋野（かやの）には、あふれるほどの鹿がいます。その立つ足はというと、野原に蓬（よもぎ）の茂っているさま、差し上げた角はというと、枯れ松の林でございます」

◎それを聞いたオホハツセには企てがひらめいての、狩りの好きなイチノヘノオシハを淡海に鹿狩りに行こうと誘うたのじゃ。企てなど何も知らぬイチノヘノオシハは喜んでの、二人はともに蚊屋野に到ると、それぞれ狩り小屋を作って宿り、明日の朝の狩りに備えることになった。

◎狩り：一種の占い（うけひ）として行われていた。王権の儀礼でもあった。

◎オホハツセは狩り衣の下に鎧をつけ、弓を手に矢筒を腰に下げると、馬に乗って出かけて行ったのじゃ。そして、すぐにオシハの馬に追いついて並んだかと思うと間もなく、矢筒から矢を抜いて、オシハを射落としてしまった。そして、馬から降りると、すぐその体を切り刻んでの、馬舟に押し込んで土の中に埋めてしまったのじゃ、塚も作らず土を平らに均しての。すごい早業じゃった。

◎ここで、イチノヘノオシハの幼い御子、オケとヲヨの二柱の御子たちは、その乱れを聞くとの、すぐさま家を出て逃げたのじゃ。

◎オケとヲヨ：この話は前にも読んだ、前にも書いたので、どこで書いたか探すうちに、メモが出てきたので・・・

◎ちょっと復習であるが、下記にコピペ、もう一度読んでみる。

◎712年奏上された古事記は、そののち永らく表舞台に登場することはなかった。日本書紀は、成立直後から官人たちに講じられ注釈がなされ、様々に引用された。古事記の最古の写本は、712年から660年も経った1371年に書写された真福寺本古事記である。

◎太朝臣安万侶（おおのあそみのやすまる）奈良公園から奈良教育大の方向、10キロほどのところに墓がある。1979年木炭に覆われた奈良時代の木棺が見つかり、銅板に彫られた墓誌が発見された。墓誌は漢文なので翻訳すると、「平城京の左京四条四坊に住んでいた従四位下勲五等の太朝臣安万侶が、養老七年（723年）七月六日に死去した。そして、同十二月十五日に埋葬した」続日本紀に載っている死亡年と符合するらしい。墓誌では、死亡日が一日ずれているとか、左京四条四坊（今の JR 奈良駅付近）に住んでいたとか、埋葬されるまで五か月もあったなどの新情報があった。墓が発見され、稗田阿礼とは違い（この人は虚構の人なのか？）、実在の人物である。従四位下で、民部卿、今でいえば大臣経験者のりっぱな貴族である

◎安万侶の撰録を裏付ける古事記の序は8世紀初めに書かれたもので、古事記の本文の方は、安万侶の時代より前の、7世紀半ばから後半にまとめられたというのが私の考えである。50年ぐらいの時間差・・・

◎先生：どう見ても古事記の序の内容が怪しすぎる。安万侶は古事記を編纂していないし、序を書いたのも彼ではなかった。

◎なんと古事記、「稗田阿礼の口承を基に 太安万侶が編纂した」このように教科書で習ってきたが、「これはうそだ」ということらしい、とほほ。

- ◎N が亡くなった。2月2日らしい。その前の日に、奥さんから電話があったが、その時オレは安威川河川敷へ行っていた。帰って来て、「Nさん どうも 悪いらしい・・・奥さんからの電話・・・」それを聞いて、なにをいっているかなと気軽に考えていた。「また あそぼ・・・」と知っているのか、「ちょっと 来てくへんか・・・」と知っているのか、なんて彼の顔を思い浮かべながら、あっちの用事こっちの用事と電話のことを忘れていた。三か月ほど前に行ったときに、「今度は オレ ここでビール飲む だらだら時間そ・・・」なんて言いながら帰った。年末に、彼の家を覗く予定だったが、コロナめがまたまた流行り出したということで、箕面方面に行く用事が制限され、1月もそれがまだ続き、なかなか会えなかった。
- ◎亡くなった日には電話が通じない、おそらくいろいろなところに電話連絡をされていたと思う。翌日やっと通じ、「え・・・あ・・・そう・・・昨日・・・」「ちょっと 顔を見にいく」と会いに行った。彼の寝ている横で、奥さんやら娘さんから話を聞いた。しばらく前からおかしくなりだしたらしいが、本人は、「家にいたい」という希望で、往診の医者や、通いの介護士たちも、「家で死ぬ人 病院には行かない人」そういうふうに接していたらしい。最後まで煙草を吸っていたので、「酸素吸入もできない 爆発するから・・・」「ちょっと 楽になるように モルヒネでも・・・」ということだったらしい。その話を聞いて、死期が早まったのも納得、なにも病院で死ぬのがいいわけじゃない、延命治療もせずに早々死ぬのも生き方、「死ぬ人に 生き方」この言い方もケタイな表現だけど、ま、いいかなと、おおいにNの死生感に拍手を送っている。
- ◎彼の車に乗せてもらって、国道171号線を走りながら、「あかん 替わる こわ〜て 乗ってられん」なんて言っていたのが4年前。それから徐々にパーキンソンが進み、1年前ぐらいからドライブも行けなくなった。それまで何度かオレの車に、車いすを積んで、「自然を見に 行こう」と出かけた。カメラマンの彼だが、もうミラーレスカメラを持つのがやっと、ものの前に立って、左右前後に動けない、じっくりカメラも構えられない、そんな状態でまともに写真も撮れない、本人も歯がゆく情けない想いをしているだろうとは思いながらも、助けるわけにもいかない。
- ◎オレのパソコンの待ち受け画面は彼の写真、カエルの写真、それをずっと使っている。いつ見ても楽しく飽きることがない。永らく通って撮っていた里山の田んぼで、夜中に何度も行って撮ったそうだ。この時カメラを水田に落とし、“ペンタ67”というカメラをおじゃんにしたとぼやいていた。「この写真 見てくれ どない・・・」なんて調子で写真を送ってくれた。なので、長い間に軽いデータのを千枚ぐらいもっている。
- ◎Nとは知りあってもう30年ぐらいになるのかな、年に2.3回会って話したりしていた。時には、「撮影に行くので 一緒に行こか」なんて100キロ200キロの遠出、信州も二度ほど行った。そんな彼の影響を受けて、カメラに興味をもち、フィルムカメラもいくつかゲットした。ゲットはしたが、写真は上手く写せなかった、下手だったと我ながら思っていた。「オカムラハン トウミリの 広角 買って み」オレは今、ニコンのAPS:D7000を使っている。10ミリのレンズを調べると10万円ぐらいする。「ええ・・・カメラより高い・・・」「そんなものを買って 買っただけなら 上手く撮れなかったら・・・」冷や汗をかきながら逡巡していた。ネットで5万円の中古を見つけ思い切った。「トウミリ 買ったら 10ミリだけで 撮って み」オレは、写真はほとんど山に行つての風景写真が多い。そんなことで、必要以外の写真は全部10ミリで撮っている。
- ◎次にPHOTOSHOPソフトの話。「RAWで撮りや〜 PHOTOSHOPで現像ショ」このソフトは四半世紀前に初めてマックのパソコンを買ったときに、必需品だから買いなさいと言われて買った。パソコンは100万円以上したと記憶している。このソフトも8万円ぐらいだったかな。このソフトはオレなりに利用している、絵のことでおおいに役立っている、じゅうぶんに元は取っているが、写真の現像は知らなかった。「ここと ここと こうしたら こうなる・・・」Nスタジオで、2.3度通って習得した。それ以来、山の写真が楽しくなった、上手く写るようになった、褒められるようになった、と嬉しい限り。
- ◎「Nさんの 展覧会 企画せんと アキマセンな」一緒にNスタジオに遊びに行ったBさんがのたもうた。それまで、展覧会のことはまったく思いもしなかったが、「むむむ」とうなっている。写真展もアリかな。

- ◎8:30に御杖村青少年旅行村にやってきた。三峰山は何度も来ている、奈良・三重の県境にある山、奈良県側からは御杖村から、三重県側からは東吉野の高見山の下にあるトンネルを抜け、飯高をぐるりと回って登る。
- ◎霧氷祭りと大きな看板が出ている。ここに9時に集合と決めて、茨木を朝6時半に出発した。阪急茨木市駅前で相澤さんを、中央環状線で直子ちゃんを乗せ、摂津北1Gから近畿道を南へ、南阪奈に乗って宇陀市に入り、それから相当走り、御杖村の標識を見つけた。三宅・吉中のお二人とはここで合流、駐車場にはすでに20台ぐらい止まっていた。「そうか 日曜日だ」と納得したが、登り始めて後ろを見ると数珠つなぎの人の列が押し寄せている。どうも霧氷ツアーバスの方々が出て来たようで、GWやお盆の時期の山の風景であった。
- ◎いつも山計画を立て、地図にコースを書き入れ、参加者の氏名・年齢・住所等を書き入れ、人数分コピーして皆さんに配布している。「これで 登山届に・・・」「個人情報が見え・・・」「・・・」「届は出した方がいいよ 出さないと保険が降りないよ」「そらあ 出さねば・・・」登山届の箱に入れる。
- ◎9:10に歩き出した。天気を心配していたが、お陽さんが照っている、暖かい、道中も雪がなかった、山を見上げて上の方にちょっとあるぐらいかな。お目当ての霧氷は望めないだろうと歩いている。ジャンパーはザックの中に入れておいたが、チョッキも脱いだ、春の陽気だ。
- ◎久しぶりに滝の方から登ってみようと林道をまっすぐ進んだ。「煙の 臭い・・・」「まだ 鼻が利く 身体が若いということだ・・・」そう言えば煙の匂いがすると進んで行くと、不動堂と書かれた小屋に赤い幡がたなびき、登山者とは違う格好の人たちがいる。畳半分ぐらいの天狗のお面を立て掛け、花や果物が備えてある。聞くと今から堂内で護摩を焚き、滝修業があるらしい。年配の男女の方々もうろうろしておられる。
- ◎しばらく登ると地面が凍ってきた、「滑るね 気をつけて」かすかに残った雪が昼の暖かさで融け、それが夜の寒さで凍っている、ツルリすってんは嫌である、もう少し上でアイゼンを着けようと登った。オレも最近では6本爪の軽いアイゼンを持ってきている。皆さんもチェーンアイゼンか、最新の恰好がいい6本爪のアイゼンだ。アイゼン装着でツルリの心配もなく、ザックザックと固まった雪に歯が食い込み心地いい音が響く。下を見ると50人100人ぐらいの団体が後ろにいる、あれれ、この狭いところで追い抜いてもらうのも危険、四五人ならすぐに追い抜いてもらえるが、ここで長らくの退避は我々にとって危険なのでそのまま進んだ。階段が丁寧に作ってあるので歩きやすいような、歩きにくいような、ま、感謝である。
- ◎えんやこら登った先に小屋が見えた。今日は中には入らなかったが、外にも人がたくさんいて休憩している。この山でこんなに人が多いのは初めてだ。たまに同年配ぐらいかなと思えるジジババもいるが、今日はほとんどが中年の方々の賑わいである。いやいや、サングラスをかけた小学生か中学生ぐらいの女の子を見たね、これは生意気で可愛い。もう一人、2歳ぐらいの子を背負子に乗せたパパとママ、交互に背負って頑張っている、後ろに座っていた子供も可愛いねえ。
- ◎先程の避難小屋の傍のデカイ樹、いつ見てもほれぼれする、まだまだ元気いっぱいによきによき枝を伸ばしている、毎度こいつを見るのが楽しみだ。さあてっぺんまでもうすぐ、尾根道に登り、左下に御杖の村がまる見えになる。このあたりでも雪は少なく20,30センチぐらい残っているかなというぐらいかな。風がきついのか樹も大きくなれず、胴体ぐらいの幹が一番大きいぐらいの樹々がヒョロヒョロ立っている。風は冷たい、日差しがあり、影がきつく、薄汚れた雪、泥状の地面、常緑樹の緑も見える。枝に雪ダルマを10個ほど並べた風景が待っていた、おお、すごいね、いいねえ。
- ◎八丁平で飯を喰った、のどかな芝生の上、弁当を広げた。寒さを覚悟してテルモス2本に湯を入れ、ヌードルとみそ汁を作って飲んだが、この暖かさでは普通にピクニック気分でおいしくゆっくり飯が食えた。目の前の風景は山また山が連なったその向こうに太平洋があるのかな、ところどころに雪が残り、こんもり緑と、枝だけの樹、それこそ昼寝でもできそうな気候で1時間ほど過ごした。
- ◎2時間ぐらいで駐車場まで下りた。「お茶にしよう」地面に座り、湯を沸かし、コーヒーを飲み、お菓子を喰って1時間ほど過ごした。家に帰ったのは7時過ぎだった。

◎加賀国諍蛇蜈島行人助蛇住島語 <加賀の国の蛇と百足と争ふ島に行く人蛇を助けて島に住む語第九>

◎暴風で無人島に漂着した下衆七人が、島の主の大蛇（地主神）に依頼されて宿敵の百足を倒し、神に感謝されて、その勧めで家族ともどもその島に移住し、神の加護のもとに、末永く子孫が繁栄した話。

◎神を助ける話と同時に、猫島の住民の出自と開拓の歴史を伝える伝説でもある。人間が、神の依頼を受けて神いくさに参加し、一方の神を助けて勝利をもたらせる。神は助力を感謝し特別の恩恵を施し、人間もそれを契機に神と特殊な関係につながる。

◎“猫島”は現在の“舩倉島：へぐら”らしい。能登半島の輪島から北に50キロの位置にある。徒歩1時間で一周できる。50年前までは定住者がなく、暖かい季節にたくさんの人がいたらしい。現在は50人定住者もいる。弥生時代の遺跡がある。渡り鳥の休憩ポイントで、探鳥者に人気。遊びに行くにはフェリーがあるが、水・食糧は用意していくほうがいいと書いてある。

◎今昔、加賀ノ国〇〇郡ニ住ケル下衆七人（げす：下賤というが庶民の意）、一党トシテ常ニ海ニ出テ、釣ヲ好テ業トシテ、年来（としごろ）ヲ経ケルニ、此七人一船（このしちにんひとつふね）ニ乗テ漕出ニケリ。此者共釣シテ出レドモ、皆弓箭兵杖（きうぜんひょうちよう：武器の総称）ヲナム具シタリケル。遥ノ沖ニ漕出テ、此方（こなた）ノ岸モ不見程ニ、思モ不懸（かけぬ）ニ、

◎加賀の国に住む、七人が仲間を組んで、海に出て釣をするのが生業だった。この者たちはおのおの、弓矢や刀剣で武装していた。

はるか沖に漕ぎ出して、思いがけず突風が吹き出し、あれよあれよという間に流されていく。どうする術もなく、櫓も引き上げ、風のままに、もう死を待つばかりと泣き悲しんでいると、遠くに島が目に入った。人がわざと引き寄せるように船は島に着いた。

年の頃、二十歳あまりのたいそう美しい男が歩み寄ってきた。男が、「あなた方を呼び寄せたのです」と言って、酒や御馳走の入った長櫃を持ってこさせた。七人はおおいに飲み喰った。「あなた方を迎えたわけは、向こうの島の主が、わたしを殺してこの島を手に入れようとしています」「明日 その戦いが始まります わたしが支えられなくなったら、矢を射て助けてください」

それを聞いた漁師たちは、「こうして参ったからには、命を捨ててあなたの下知に従いましょう」小屋を作り、矢じりを十分に研ぎ澄まし、弓の弦を検査して、闘いの時を待った。

さて、攻めてくる方角を見ると、一陣の風、海の面がただならぬ恐ろしい様相、大きな火の玉が二つ、押し寄せてくるものを見れば、十丈：30Mもある大百足が泳いでくる。山の方を見ると、胴回りが一抱えもある大蛇が降りてくる。舌なめずりをして向かい合った。百足は大蛇めがけて走り寄り、食い合い、お互いに血まみれになった。四時間ばかり食い合うが、百足はもともと手が多く優勢に立つ。蛇は弱りかげんになり、漁師たちに合図を送る。漁師たちは、矢をさんざんに射掛け、そのあと太刀で百足の手をすべて切り放ち、百足を切り殺してしまった。しばらくして、例の男が足を引きずり苦しそうに現れ、食べ物などを持ってきて、言葉を尽くして感謝する。男は漁師たちに、「何かにつけて住みやすい島なので、妻子を迎えてここに住みませんか」という。

七人の者たちは、元の家に戻り、船七艘、作物の種などそろえ、島に渡り住みついた。

時が経って、能登国の、常光という船頭がかの島に漂着した。島の者たちが出てきて近寄らせず、しばらく岸に船をつながせ、食物などをよこしていた。船頭がいうには、「ちらりと見たところ、人家が重なり合い、京のような小路があり、人の往来も多かった」

最近でも、遠くからくる唐人は、その島に寄って食料を手に入れ敦賀に来るそうだ。「こんな島があると、人に話すな」と口止めされるそうだ。まことに楽しい島であるようだ。

◎安威川河川敷に来ている、どんより曇っている、空を見あげると青空はまったくなく、薄いグレーが全面を覆っている、太陽はと探すが、位置もわからない。出るときに、ほんのチラーリ降っていたので、「これはアカン濡れたら冷たい」と雨具の上下を着てきているが、ここに来て、河川敷の地面はまだ乾いている。川の両側や中洲に4.5メートルの木がまばらに生えている。今の季節、葉を落とし細い無数の枝が、ギザギザギザ、天に向かって刺さっている。あの樹たち、どこかから種が飛んできて、根性出して生き延び何年かかかってあの大きさになった、たいしたものだ。年に2.3回草刈りをする、草刈が終わって冬が来て、今は枯れた切り株の上、ギョリギョリ音を鳴らして走っている。そうそう先程、チョウゲンボウが高い空を左前の方に飛んでいった。今は、チョウゲンボウはさっと見ただけで、「おお やつだ」とすぐに見分けられる。大きさはハトぐらいだが、ハトより細め、色はトビ色だ。ウはカラスよりほんのちょっと大きいがこのカラスより細め。川の中にカモがいる、水鳥も好きな場所があるようで、いつも決まったところに、カモ、オオバン、ウが群れている。この何年か、ウが多くなってきた、今も、空に20.30羽の群れが勢いよく飛んでいく。ウはどこか遠いところに塘があって、毎日餌場の安威川に出勤してくるのだと聞いたことがあるが、ほんまかね。

◎そうそう、言いたいことがあるんですよ。昨日ねえ、今昔物語集の本を買った。今昔物語は10年ぐらい前から読み始めた。図書館で、軽い感じの解説付きの本を何冊か読んで、面白い、これならわかる、理解できると何度も借りて読んだ。古事記も同じように何度も借りて読んだ。「毎回 同じ本を 続けて借りるなら」とWEBで調べ、同じ本が1500円ぐらいで送られてきた。今昔物語もないものかと、WEBで調べたがなかなか行きあたらない。昨日、自転車で駅の方に行ったついでに、昔、覗いたことがある古本屋に入ってみた。探すのも面倒なので、奥に腰掛けているおっさんに聞いてみた。「今昔物語 ありますか」「ええ ええと 今 ないかな」なんて言いながらよっこいしょと腰を上げ、本をまたいでオレの方までやって来て上を見上げた。「あ あるある あれ」と指さす先を見ると、ずっしりした本がある、一から四まで数字があって、3000円と書かれている。一冊2000円までなら買おうと決めていた、なんとあのでかい奴が4冊で3000円だそうだ。「あれ 買い物ですよ」「四冊 まとめてでないと 売れない」「いい本ですよ」おっさんしきりに勧める。そうだね、あのでかい塊を買ったら、死ぬまで読めるね、「よっしゃ 買う」おっさん脚立を持ってきたが、「オレ 取れるよ」とそろりそろり両手を上に伸ばし、本を前に引き出し下に降ろした。ずっしり重い、「こらあ 値打ちある 嬉しい しかもほとんど新品 ガハハと声は出さないが 雄たけび」3000円を払い、買い物用の袋を出して本をその中に、自転車の置いてあるところまで闊歩した。

◎さあこれで、図書館は卒業して古事記と今昔物語でこれからずっと楽しもう。なんてえらそうに言っている。これらは勉強科目としては、“古文”だと思うが、高校生時代は嫌いな科目だった、つまらない、面白くない、と思いつつも授業は聞いていたのか、いまだにいくつかのフレーズや、先生の仕草や物腰を覚えている。40歳ぐらいに、摂陵高校の先生をしていた女性の仲間から、摂陵高校の季刊誌の挿絵を頼まれ、何年か描いた。万葉集の歌とその解説の文章で、「その文章を 読んで 抽象画の 挿絵を 描いてくれ」という話だった。その時は内容を何度も読み返し何枚かの絵を描いて提出した。その内容は忘れてしまったし、いただいた本も無くなってしまったが、今になって、保存しておけばよかったと悔やんでいる。万葉集をしみじみ読んだのはその時が初めてだった。

“古事記”“今昔物語集”“万葉集”これらの文章は、1000.1500年前の日本語、馴染んでくるとその当時の人たちの話し方が、日ごろの人それぞれの思い方が、ジワリ伝わってくる。

買った古本、“古事記”“今昔物語集”ともにほとんど新品で、「いいもの買った 死ぬまで 読めるな」と喜びながらも、昨日も寝る前のパラパラ、すぐに眠くなったと笑い話。学者ではないので、楽しめればいい、面白ければいい、オレであればいい。

三浦祐之著<口語訳：古事記>

◎オホハツセは狩り衣の下に鎧をつけ、弓を手に矢筒を腰に下げると、馬に乗って出かけて行ったのじゃ。そして、すぐにオシハの馬に追いついて並んだかと思うと間もなく、矢筒から矢を抜いて、オシハを射落としてしまった。そして、馬から降りると、すぐその体を切り刻んでの、馬舟に押し込んで土の中に埋めてしまったのじゃ、塚も作らず土を平らに均しての。すごい早業じゃった。

◎ここで、イチノヘノオシハの幼い御子、オケとヲヨの二柱の御子たちは、その乱れを聞くとの、すぐさま家を出て逃げたのじゃ。

◎前回はここまでだった。ここからオホハツセの話がしばらく続く、がまんがまん・・・がはは。

◎オホハツセは、イチノヘノオシハを殺したのち、オホハツセワカタケルと名を改めて、ようやく大君の位を継ぐことができたのじゃ。長谷（はつせ：桜井市）の朝倉の宮に坐して、天の下を治めたもうた。ワカクサカベを妻にしたが御子は生まれなかった。次にカラヒメを妻にし、二柱が生まれた。

◎あらすじ：オホハツセがワカクサカベを太后に召し上げる前のことから始めるがの・・・。大君は長谷から河内に向かう坂の上で、堅魚木（かつおぎ：神社の屋根のXは干木で丸い棒が鯉木）のある大きな家を発見。「賤しい奴め 大君の大殿に似せるとは 焼き払え」志畿の大県主が、土に額をこすりつけ、「お詫びの印に・・・」と白い犬（神聖視されていた）を差し出したのを見て、大君は家に火をかけるのをやめさせた。大君はそのままワカクサカベのもとに出向き、「めずらしいものだ 妻問いの品として差し出そう」ワカクサカベは、「わざわざお出まし下さり ただちに大君のもとへ参ります」帰途の坂の上で大君が歌った。歌の中に“平群”の地名がある。古事記の中には、関西の知っている地名が出てくることは嬉しいね。

くさかべの こちの山と	日下あたりの 近くの山と
たたみこも へぐりの山の	むしろを畳み重ねた 平群の山との
こちごちの 山のかひに	あちらとこちらとの 山と山との狭間に
たちざかゆる 葉びろくまかし	立ち栄える 葉の広いクマカシ
もとには いくみだけおひ	その木の根元には ひっそりと竹が生え
すへへには たしみだけおひ	末の方には 茂った竹が生え
いくみだけ いくみは寝ず	そのひっそり竹のごと 密かにも寝ず
たしみだけ たしにはい寝ず	茂り竹のごと しっかりと寝ず
のちも くみ寝む	のちにこそは しかと抱き合い寝ようぞ
そのおもひづま あはれ	わが思い妻よ ああ

◎次の話：オホハツセの大君がある時、衣を洗うおとめに出会った。

「誰だ」「アカイの子です」「嫁がずにおれ そのうち 召そうぞ」アカイの子は、待ち続け 80 歳を過ぎた。アカイの子は、このままでは気が晴れないと、たくさんの贈り物をもって大君の前へ。

「どこの婆さんか」「お召を待って この歳になってしまったが 心を知っていただきたいと来ました」

◎大君とアカイの子の、贈答歌が四首続く。1 と 3 は人間の男が触れることのできない巫女を歌った歌であり、アカイの子は神に仕える女だったのではないかと思われる。つまり、男の求婚を拒む女としてアカイの子はおり、それがこうした伝承として語られている。神に仕えつ女との許されない恋は、しばしば文学の主題である。伊勢斎宮がその代表である。また、天皇の妃や采女たちも、そうした禁断の女であり、人妻との恋も許されぬ関係として万葉集に歌われている。



三浦祐之著&lt;口語訳：古事記&gt;

◎前回より。大君とアカイの子の、贈答歌が四首。1と3は人間の男が触れることのできない巫女を歌った歌。  
大君が二首。アカイの子、泣きながらの、返歌二首。

みもろの いかしがもと かしがもと ゆゆしきかも かしはらをとめ	神の座す御諸の 神のカシの木 そのカシの木の下の 手を触れがたき 白壽原（かしはら）のおとめよ
ひけたの わかくるすばら わかくへに い寝てましもの おいにけるかも	引田（ひけた）の 若い栗の生えた林よ 若いうちに 連れ出し共寝すればよかったに ああ これほど老いさらばえて
みもろに つくやたまかき つきあまし たにかもよらむ 神のみやひと	神の意ます御諸に 築いた高い垣の内 あまりに長く仕え 今はどなたを頼りましょう 神に仕えるわたくしは
くさかえの いりえのはちす はなばちす 身のさかりびと ともしきろかも	日下の入り江 その入り江の蓮よ 花の咲いた蓮に似た 身の盛りの人たちは なんとうらやましいことよ

◎次の話：大君はある時、吉野の宮に出かける。吉野川で麗しいおとめに出会い、すぐにまぐわいをして長谷の宮に戻った。そののち、また吉野でそのおとめと出会い、大君は琴を弾き、おとめが舞いをたたえる歌。このおなごも、神に仕える巫女か、常世の国から舞い降りた神のおとめか。吉野は神が依りつく伝えが多い。常世：永久に変わらない神域。死後の世界であり黄泉もそこに入る。対義語として現世：うつしよ

あぐらいの 神のみてもち ひくことに まひするをみな とこよにもがも	胡坐に座り 神の手により 弾く琴の音に 舞するおとめよ 常世にもあれ
--	--

◎次の話：大君は阿岐豆野（あきずの）で狩りの時アブが噛もうとしたが、アキヅ（トンボ）がアブを喰えた。

みえし野の をむろがたけに ししふすと たれそ おほまへにまをす やすみしし わがおほきみの しし待つと あぐらにいまし しろたへの そできそなふ たこむらに あむかきつき そのあむを あきづはやぐひ かくのごと 名におはむと そらみつ やまとの国を あきづしまとふ	神の住む吉野の その小室の峰に 猪鹿（しし）がおりますと だれが わが前に来ていうたのか 八つの隅まで統（す）べる わが大君の 猪鹿を待つて 胡坐に座られ 白く輝く布の 神に包まれた その腕の力こぶ そこにアブめが噛みついて そのアブに アキヅが素早く食いついた このことを 所の名に付けようとして 空にまで高く聳える 倭の国を アキヅ島と呼ぶことよ
---	---

- ◎今日は何度も登っている北小松駅から釈迦岳を目指す。電車は8:53に北小松駅着、外に出ると三宅さんが車の中にいた。15分ほど前に着いたようだ。車窓から見た比良山系はまだまだ雪が付いている。先日来の台高山系では、6本爪のアイゼンが軽くてちょうどいい、いい塩梅に歩けたが、ここ比良では底に雪がへばり付き、エッジが効かない、歩きにくいとさんざんだった。重い12本爪を持ってくるべきだった、いっそう三宅さんのチェーンアイゼンの方がよさそうだった。
- ◎車に乗せてもらい、勢いよく石の上を水が流れている“楊梅の滝”と書かれたところが登山口までやってきた、20分をらくちんさせてもらった。そこで用意を、スパッツを着け、防寒手袋を出した。ズボンは亡くなった磯辺さんから300円で買ったスキーズボンなので防水が効いているかなと、また、最近買ったワークマンの防水ジャンパーと含め、「雨具になるだろう」と冬は雨具をザックに詰めていない。アイゼンとピッケルも、非常用のダウンジャケットもザックに入っている。
- ◎9:15出発、10:00に涼峠に到着。いつものあんころもちをいただき、水を飲んだ。日本海に近いこのあたりは雪が多いようで、10センチぐらいの新雪が積もっている。天気予報通り、朝起きた時から陽の光が見え、滋賀県北部のこのあたりも、空はまっさおさお、雲がまったくない、サングラスが要るぐらいかな、いや待て先日サングラスをポシットから出したっけ、なんてぼやきながら歩いた。
- ◎新しい雪、真っ白けの雪に陽があたり、まっしろしろ、じろじろ見つめるのはよそう、あとから目が痛くなるぞ。このあたりは森林地帯、葉っぱの隙間から、ぼこりんポコリン頂が見えるが、目的のポコリンはもっと奥でまだ見えない。このコースは、エンヤコラ、ひ～ひ～、一生懸命登らないと上まで行き着けない、しんどいが面白いコース、森林地帯が過ぎると、崖の下に琵琶湖がまる見え、景色もきれい、お気に入りである。
- ◎自分自身の死の話、先日亡くなった友人は、入院を拒否して医者も往診で診てもらい、最後にはモルヒネ治療で亡くなった。「タバコを吸うので 酸素マスクもできなかった」とあっぱれ。まだ若いもう一人の友人は、「おやじらしい 死にかただ」と言われて死にたいという。三宅さんは、今、過去の作品を整理している最中だそうで、それが終わらねば死ねないという。オレは、「そうだね 何も考えてないね なるようになるさ」
- ◎なかなか進まない、新雪にずぼずぼ潜って歩きにくい、まもなく12時近い時間になってきたが、まだこんな所かと思ひながら歩いている。6本爪のアイゼンを着けたが、アイゼンの効果がまるでない、むしろ靴底に雪の団子ができ、よけいに歩きづらい。雪山の感覚が蘇ってきた、比良あたりの新雪は、アイゼンが効かない、潜る、ラッセル気味に登る、夏道が見えないので、白い斜面を直登にやたらに登る、木をつかむ、根っこをつかむ、ピッケルを差し込む、エンヤコラである。
- ◎4人の方がたに会った、皆さん単独登山だ。オレも、「一人で入ったら だめだよ 発見が遅れるので」なんて冗談交じりで言われる。70歳ぐらいの方の、行方不明看板を何度も見ているが、もうその歳をいくつか超えてしまった、それでも山は面白い、まだ登れる、85歳まで登るぞ、なんて意気盛んだが、どうなることやら。会った皆さんはザックにワカンやスノーシューをぶら下げている、「比良は ワカンですぞ」と言っていた人がいたが、水っぽい、潜る新雪はアイゼンよりワカンがいい。20～50センチの積雪の中、いつもに比べ、2割、5割の体力がいる、なかなか進まない。
- ◎12時なので飯にしようと思部で、乾いた倒木があるところに腰掛け、弁当を広げた。昨日はご飯がなかったので、スーパーで買った助六寿司を買った。カップヌードルにテルモスの湯を入れ、しばらく待った。ヌードルをすすり暖かい水気を腹に入れ、助六をほおぼった。
- ◎飯が終わって、「ま 行けるとこまで もうちょい 登ろう」と登り始めた。ヤケオ山までの斜面がなかなかきつい、それ行けやれ行け、一步一步、どっこいしょ、琵琶湖が、下の街が一望できるところまではやってきた。「もう 一時半だ 今日はここまでかな ヤケオはもうすぐだと思ったが もう一つ先のポコリンのようだ ま ヤケオ直下で撤退 にしておこうか」久しぶりに、下りは尻セードを楽しんだ。勾配がきついところに尻をつくると、ズルズル、1メートル、5メートルと滑る、ガハハと楽しんだ。